

導水施設形埴輪（圀形埴輪・家形埴輪・樋形土製品）



①概要

公開している画像の中に、「導水施設形埴輪（どうすいしせつがたはにわ）」という画像が4点あります。これらは、行者塚古墳の発掘調査で同じ場所から見つかった3点の遺物（圀形（かこいがた）埴輪・家形埴輪・樋形土製品（といがたどせいひん））を示したもので、特に圀形埴輪と家形埴輪はセットで出土したことから、その配置を再現した画像を含めた4点を公開しています。

発見された場所は、古墳の後円部と前方部が交わる「谷部」と呼ばれる場所で、古墳を山にみたと、上から流れてくる水を取り入れ、塀（けい）で遮蔽された空間内に建てられた建物で「水の祭祀」が執り行われた様子を表現していると考えられています。

②ココに注目！！



この圀形埴輪は、幅93.7cm、奥行57.4cm、高さ34.7cmで、上から見ると長方形をしています。注目点は、地面と接する場所にあけられた「透し孔（すかしあな）」と呼ばれる半円形の孔です。各辺の左右に1か所ずつ均等に配置されていますが、1か所だけ不自然に中央に寄りすぎているものがあります。もしかしたら、山側から流れてきた水を、この部分から場内へ引き入れるようなイメージで作られているのかもしれません。



幅（平側）32.0cm、奥行（妻側）27.2cm、高さ35.0cmの小型の家形埴輪です。屋根は、2つの斜面が合わさった切妻造（きりつまづくり）で、地面を床とする平地式建物です。壁の表現はほぼなく、側面は柱（角柱）と開口部で占められています。

注目は、屋根の上に載せられた堅魚木（かつおぎ）と呼ばれる棟飾りです。円筒状に表現されるのが一般的ですが、この家形埴輪では鳥付きの堅魚木が2点出土しています。

圀形埴輪と家形埴輪の両方が配置されている画像は、発掘調査の結果を忠実に反映させたものです。建物は長方形の圀いの片側に寄せて置かれており、圀形埴輪の入口と建物の開口部が重なるように配置されています。建物が配置されていない空閑地には、樋形土製品が置かれていたのかもしれません。

実際の祭祀の様子をどこまで再現しているのかなど、眺めていると様々な疑問が湧いてきます。

樋形土製品は、圀形埴輪や家形埴輪の近くに散乱した状態で出土したため元の配置が特定できません。接合の結果3片の塊まで復元できましたが、パーツが足りないため全体の正確な形も不明です。現状での大きさは、長さ32.2cm、最大幅5.2cm、高さ2.3cmです。

現状では、端から水を取り入れ、大きな部屋（槽）、小さな部屋（槽）を通過し、トンネル状になっている橋の下を通過して、細い管（樋）へ流れるというイメージで復元案が検討されています。